

お茶の水本館

JR御茶ノ水 御茶ノ水橋口 徒歩2分

新高3生 冬期講習から オープン!

※詳細はHPをご覧ください。

新高3生にニュース!
冬期からお茶の水オープン!!
説明会:12/11(日)10:30~(予約不要)
冬期開講科目:新高3生 英語・数学
(高1生 数学 同時開講)

説明会・入室テスト

説明会 10:30~ 入室テスト 11:30~

11/3(祝:木)
会場:新宿11/13(日)
会場:新宿11/23(祝:水)
会場:渋谷12/11(日)
会場:お茶の水

※[説明会]予約は不要です。会場をご確認の上ご参加ください。[入室テスト]電話にてご予約ください。TEL 03-5371-5487

2011年 大学受験合格実績 第5期 在籍311名

東大各科類

理科I類	25名
理科II類	10名
理科III類	1名
文科I類	12名
文科II類	8名
文科III類	6名

国公立大138名

京都大	4名
一橋大	8名
東工大	5名
東外大	6名他

東京大

62名

国公立慶医

39名

慶應大

141名

早稲田大

148名

上智大

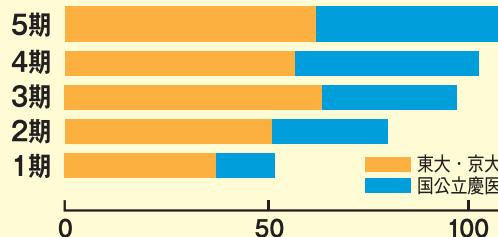
48名

医学部医学科106名

東京医科歯科大(医)	1名
東北大(医)	1名
千葉大(医)	4名
北海道大(医)	1名
横浜市立大(医)	3名
筑波大(医)	5名他
※国公立大医計33名	
慶應大(医)	6名
東京慈恵医大(医)	8名
順天堂大(医)	10名
日本医大(医)	8名
昭和大(医)	7名他
※私立大医計73名	

東大・京大
+
国公立慶医
合格実績

5期在籍311名中**105名**
4期在籍307名中**102名**
3期在籍271名中 **99名**
2期在籍232名中 **79名**
1期在籍187名中 **52名**



GnoTube

GNOBLEを動画で体験!

どんな先生がいるんだろう?
どんな授業をするんだろう?
グノーブルは何が違うんだろう?

www.gnoble.com/gt/

大学受験グノーブル事務局【新宿本館・受付】

お問い合わせ | 月～金曜日15:30～21:00 / 土曜日14:00～21:00 / 日曜日休み
〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F

TEL 03-5371-5487 FAX 03-5371-5488

新宿本館

アクセス: JR新宿 サザンテラス口 徒歩1分
〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F

渋谷本館

アクセス: JR渋谷 宮益坂口 徒歩5分
〒150-0002 渋谷区渋谷1-7-6 青山CRビル1F

お茶の水本館

アクセス: JR御茶ノ水 御茶ノ水橋口 徒歩2分
〒101-0062 千代田区神田駿河台2-5-5 東京メトロ御茶ノ水 徒歩3分
村田ビルディング3F (1Fスタートバックスコーヒー)

知の力を活かせる人に...
東大・医学部・早慶 難関大学の受験指導

GNOBLEグノーブルにアクセス。東大にアクセス。
www.gnoble.co.jp

Gno ble

グノレット

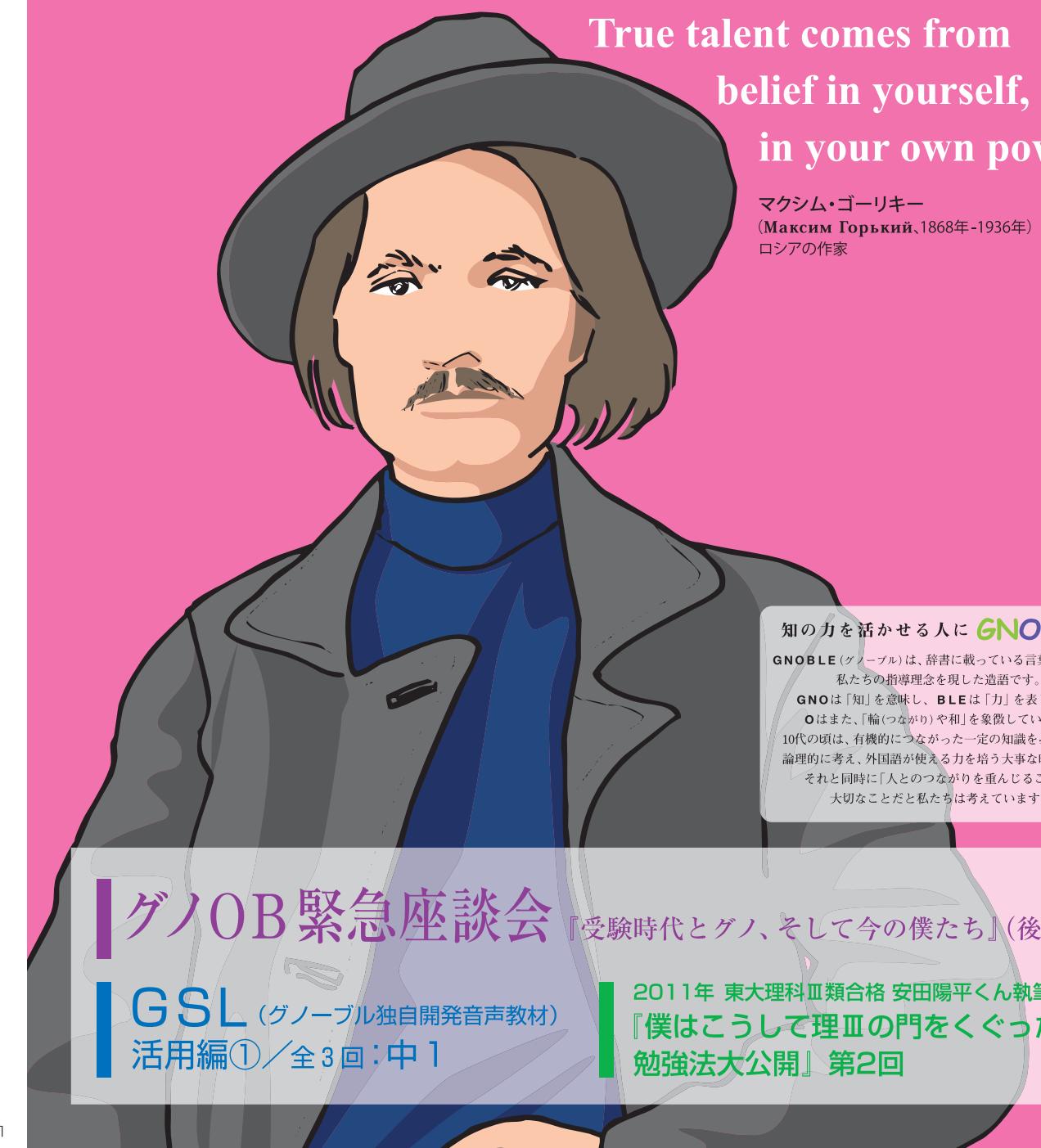


2011年10月発行

中学生・高校生の保護者の方へ

True talent comes from
belief in yourself,
in your own power.

マクシム・ゴーリキー
(Максим Горький、1868年-1936年)
ロシアの作家

知の力を活かせる人に **GNOBLE**

GNOBLE(グノーブル)は、辞書に載っている言葉ではなく、私たちの指導理念を現した造語です。

Gは「知」を意味し、BLEは「力」を表します。

Oはまた、「輪(つながり)や和」を象徴しています。

10代の頃は、有機的につながった一定の知識を身につけ、論理的に考え、外国語が使える力を培う大事な時期です。

それと同時に「人とのつながりを重んじること」も大切なことだと私たちは考えています。

グノB緊急座談会

『受験時代とグノ、そして今の僕たち』(後編)

GSL (グノーブル独自開発音声教材)
活用編①／全3回:中1

2011年 東大理科III類合格 安田陽平くん執筆

『僕はこうして理IIIの門をくぐった! 勉強法大公開』第2回

グノOB 緊急 座談会

『受験時代とグノ、 そして今の僕たち』(後編)

遊びに来てくれた卒業生



かめい りょうすけ

亀井亮佑くん

東大医学部 医学科4年
(筑波大附属駒場出身)

たにうち りょう

谷内 梢くん

東大理学部 物理学科4年
(神奈川県立多摩出身)

はんだ たけひさ

半田剛久くん

東京医科歯科大 医学科4年
(筑波大附属駒場出身)

もりた ゆうすけ

森田悠介くん

東大理学部 物理学科4年
(筑波大附属駒場出身)

頭が自然にフル回転する環境。 それがグノーブルだった。

森田：僕は1度、東大の合格実績が高いといわれる塾にも行ったことがあったのですが「全然ダメだ」と思いました。「中山先生の授業じゃなきゃ意味がない」と実感したものでした。

グノーブルは空気が濃密で、頭も自然とフル回転する環境でしたが、他の塾では醒めてしまう時があるというか、乗っていけない部分があつて。やっぱり塾に行くからには、集中して頭を使なきゃ意味がないと思いますし、そうした環境で勉強するためにはグノしかないとも思い

ました。

亀井：グノーブルでは授業が終わるといつも「いっぱい学べた」と充実感が味わえました。密度が濃いということもあるんですが、「へえ、そんなこともあるんだ」という発見の連続で、時間を忘れて夢中になっていました。

先生の方でも僕のそんな気持ちに応えてくれました。質問に行けば必ず丁寧に答えてくださったし、できた時にはきちんと評価してくださいました。先生が自分のことをしっかり見てくれていると思って、そんな信頼感がますます頑張ろうという気持ちにつながりました。

半田：高2の終わり頃でしたか、僕は「中山先生に認めてもらいたい」と強く思っていたことを覚えていま

前編では、iGEMにチャレンジして世界の檜舞台で活躍した時の体験談、東大五月祭の研究発表で経験した焦燥感や達成感といったことを中心に、4人のOBたちの充実した学生生活を紹介しました。印象的だったのは、4人が“妥協なき時間”を過ごしていて、そうした力は「グノーブルで培った」と話してくれたことです。後編では、今なお太い縛で結ばれる彼らとグノーブルの関係が、さらに浮き彫りになります。

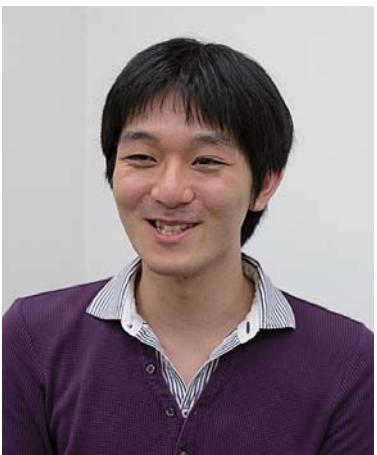
(取材：吉村高廣)

先生に認められたい」という気持ちを強く持っていました。

先生は生徒たちの成長をよく見ていらっしゃるので、実力をつけて行く自分の姿には気づいてもらえていましたが、あえてアピールしたいという思いもありました。

中山先生は、できる生徒に目をかけるのではなくて、成長しようと頑張る人を応援してくれるんです。スタート時点の実力は劣っていても、着実に伸びて行けばその事実を認めてくださるというフェアな視点を持ちなので、それが僕をやる気にさせてくれたのです。

でも、高1の時は不真面目で、ただ出席していただけだったので、あの頃は中山先生を恐いと思ってました(笑)。



す。その頃は「英語力が伸びてるな」という実感を持ち始めた時だったので「頑張ってついて行くぞ」という気持ちでいました。授業中に指された時にちゃんと答えられるように復習したり、しっかり考え方を身につけていくと努めていました。

先生の方でも僕のそんな気持ちに応えてくれました。質問に行けば必ず丁寧に答えてくださったし、できた時にはきちんと評価してくださいました。先生が自分のことをしっかり見てくれていると思って、そんな信頼感がますます頑張ろうという気持ちにつながりました。

谷内：僕も半田と同じように「中山

たよね。高3の頃は、前の方に座っている谷内君と、授業前にはよく雑談も交わしていたのを覚えています。

知識欲旺盛な生徒なら、 中山先生に習いたいと思うはず。

森田：中山先生は、常に多方面にアンテナを張りながらどんどん知識や情報を蓄えていらっしゃったし、授業準備も完璧、その上で発足したばかりのグノーブルの代表として仕事をもされて、さらには、グノのホームページは全部先生がお作りになっているとも聞き、「いったい、いつご自分の時間を確保されているのかな」と、不思議でなりませんでした。

時間を最大限に活用された上で、授業になったら全身全霊で僕たちに向かってくださっていて、そんな姿を見ればやっぱり「勉強しなきゃ」と自然に思えました。

谷内：先生の場合、どこからか集めてきた知識を単に授業で話しているのではなくて、ご自分の興味の上にしっかりと蓄積されている知識だったという印象でした。だから、僕たちも思わず話に引き込まれたり、授業で扱った英文も、深いところまで理解できたと思うんです。

僕自身も、どちらかというと好奇心旺盛なタイプだと思うのですが、だからこそ中山先生のそうした姿勢に刺激を受けましたし、知識欲のある生徒なら誰だって「こんな先生に習いたい」と思うはずです。

半田：こんな言い方をするのは先生に失礼かもしれません、「薄っぺら」ではない方だと思っていました。

もちろん、最初から積極的な人たちや、コツコツ積み上げているタイプの人もいます。分岐点があって「あっ、変わったな」とはっきり分かる人たちもいます。谷内君は高2のあるときから座る位置まで変わりまし

ですが、話自体をずっと聞いていたい、といつも思っていました。

谷内が言ったようにご自身の興味や経験に基づいた知識ですので、それを話す先生の言葉には熱がこもっているわけです。僕らはその熱に導かれるように疑似体験している気持ちになるというか、飽きることがありませんでした。

亀井：僕は英語の“教え方”ということにプロ意識を感じていました。学生が教える塾とは大きな違いがありました。

「英語は生きている言語なのだから、参考書に書いてあることだけを覚えればいいわけじゃない」と言われたことを強烈に覚えています。先生の授業はめちゃくちゃ早口で、黒板の字はあまりきれいではないですが(笑)、大事な情報や、自分じゃとても気づけない指摘に溢れた授業で、こちらの集中力も思わず高まって、長時間なのにいつもあつとい

う間でした。

語源やその言葉の持つニュアンス、英文を組み立てる感覚、英語の論理の運び方など、言語感覚そのものを磨いていただいたというか、英語での思考力を鍛えていただいて、そのことは本当に有意義だったし、それが中山先生を尊敬するに値する方と思えた理由の1つです。



半田：まさにその通りでした。

亀井：あの頃僕らは受験生だったわけで、グノには受験勉強のために通っていました。でも、英語を勉強するからには、その先を見据えることも大事だと思います。

谷内：僕は、ただの受験勉強は好きじゃありませんでした。グノーブルでの勉強だったからこそ、「勉強は将来の自分を創るためにものだ」という気持ちが芽生えたのだと思います。



中山：もちろんグノーブルは大学受験塾ですから、生徒たちが志望校に合格できるお手伝いができなければ存在意義はありません。

しかし、そこで完結してしまったのでは、将来を生きる中学生や高校生を指導する立場としてはだめだと考えています。たとえば東大に合格できれば、もちろんそれは喜ばしいことですが、「結局、英語が使えない」という指導では、一生懸命頑張っている生徒たちへの裏切りになってしまいます。

「英語に対して抵抗感がない」、普通にそう思える自分がいる。

森田：今は英語で情報を収集することに対する抵抗感はまったくありません。そのことは、グノに通って得られた大きな収穫のひとつです。

大学に入ってから様々なところで英文に触れたたび、「そういえば中山先生がこんなことを言ってたな」と思い出す機会が結構あります。グノに通っていた頃に比べると、様々な

分野の英文に触れてはいないのですが、自分の興味ある分野の英文は、一応、不自由なく読めているので「そんなに錆びていないのかな」と勝手に思ってます(笑)。

谷内：僕の場合、語彙力はあの頃に比べて錆びているかも…。

亀井：そりゃヤバイね(笑)。

谷内：そろそろ大学院入試があるので取り返さなくちゃならないんですけど。でも肝心なのはそういうことじゃないんです。僕がグノで学び得た最大の衝撃は文章への接し方ですね。

中山先生はしつこいくらいに「英文は前から読んで意味をとれ」とおっしゃっていましたが、僕はそのやり方がピッタリきて、実際に高校時代も英語力が伸びたし、大学に入つてからも英文を読む時に大いに役立っています。

僕らはもう、英文を速く正確に読むためには“返り読みをしない”ことが当たり前だと思っていますが、他の学生にしてみれば驚きかも知れませんね。もちろん、大学の文章は難しいことは難しいわけですが、どんな英文にしたって考え方は一緒ですからね。

半田：G S Lという音声教材を使ってのリスニング、シャドウイング、音読といった復習方法がグノの大きな特徴だったと思います。それを1ヶ



月、2ヶ月と続けていると確実に効果が出ることは実感していました。

実は僕、英語で家庭教師をやったことがあるんです。ドイツ人の高校生に英語で理科を教えるという…。

一同：へえ、それは凄い。

半田：そういうアルバイトをしてみて、大事な力を育てていただいたなと実感しています。

亀井：グノーブルの英語は、ネイティブの感覚を目指すというところがあって、言葉の選び方とか、文をどう組み立てていくかという点など、英語の感覚を磨いていただいたと思うんです。

いろんな論文に触れていて、英語を母語としている人の文かそうでないかは、なんとなくすぐに分かります。論文の中には、「これじゃ伝わりにくいな」とか、「こうした方が明快だ」と思えることもよくあって、自分の中にはいくらかでも、敏感な英語センスが備わっているように思います。

谷内：iGEMで切羽詰まった状況の中でも、亀井って本当に英文読むの速かったよね。

亀井：グノーブルのお陰です(笑)。

それから、英語のプレゼン能力もこれからは大切だと思います。

僕は医学部にいるわけですが、研究というのは3年くらいかけて一生懸命データを積み重ねて準備します。それを学会で発表する時間は偉い人でも15分とか30分くらい。自分が3年かけて積み上げたものを15分とか30分でいかに世界の人にメッセージとして伝えられるかが重要になります。どれだけ優れたデータでも上手く説明できなければ無駄になってしまいます。

今になって、高いレベルの英語教育を受けられたことの有り難みがよりよく分かります。

中山：魅力あるプレゼンを行うに

は、英語のロジックを踏まえた話の運びが大切でしょうね。それから準備と情熱でしょうか。人を惹きつけるプレゼンで世界的に有名だったアップルのスティーブ・ジョブズも、周到な準備をしていたそうですし、とても楽しそうに話す様子が魅力ですね。

亀井：中山先生の授業がそのまま参考になりそうですね。面白い教材を準備されて、楽しそうにお話しされて。

相乗効果が生む、 グノーブル独特の空気。

中山：私たちが情熱を持って授業ができるているとしたら、それは皆さんのお陰だと、ある時気づいたんです。

皆さんより1年先輩のグノーブル生たちと話していた時に、「先生って、どうしていつも元気なんですか?」と聞かれて、とっさに浮かんだ答が、「皆さんからエネルギーをもらっているから」だったんです。そうしたら、彼女たちも「私たちこそ先生からエネルギーをもらっているんです。それで、授業が楽しいんですね」と。



グノーブル代表 中山 伸幸

他の先生からも、「グノーブルは教室の空気が特別」と生徒に言われて嬉しく思ったという話を伺ったことがあります。多分、生徒の皆さんと私たちの関係が調和してグノーブルの空気をつくっているのだと思います。

谷内：グノーブルの先生は、いつも僕たちに対して心を開いてくれてい

ますよね。だから、英語に自信が持てなかったときにも、思い切って質問に行けました。

中山：皆さんのがどんどん質問に来てくれるとは、実は、私たちにとって、とても勉強になることもあるんです。

解説に分かりにくいところがあればそこを指摘していただけるのが、皆さんの質問ってことです。質問に来てくれた人のやりとりで、こちらの説明の仕方が深まったり、新たな角度からの切り口が生まれたり、ということがよくあります。

実は、私も若かった頃には、「どうしてこれが理解できないの?」という気持ちが先に立って、いろいろなことしばしばありました。ところが、質問に明快に答えようと頑張っているうちに、「実はこっちこそ教えてもらっているようなものだ」と気づきました。つまり私たちの方も皆さんに育ててもらっているんです。

医学部という選択について、 後輩たちに知ってもらいたいこと。

中山：亀井くんは理科II類から医学部に行ったわけですが、これは理科III類に入学するより困難と言われている大変なことですよね。

谷内：亀井は普通のことだって言うんですよ(笑)。

亀井：いや、なんていうか。僕は最初、医学部に行く気が全くなく、生物化学を学びたくて理IIを受験したというのが正直なところです。

で、大学に入って最初の1年間、研究室とかいろいろ見てまわって生物化学関連の講義を受けたりしていましたが、「なんだか僕がやりたいことと違うな」と思ったんです。

じゃあどうしよう、と思っていた時、医学部のガイダンスを受け、その時の先生の話に共感して医学部に

決めました。もちろんそれまでも、どの学部でも行けるようにと真面目に授業を受けていましたし、点数も取っていたので運よく行けたという感じです。

でもまあ、大学受験もそうですが、妥協しないで、自分が納得できるところまで勉強すれば、テストって9割くらいは取れるんです。大学受験時代に“妥協しない精神”を学んだことが大きかったと思っています。



中山：半田くんは最初から医学の道に進むと決めて、東京医科歯科大学に入ったわけですが、その後いろいろ考えたことがあれば教えていただけます。

というのも、医学部を受ける人たちは、他とは大きな違いがありますよね。まだ世の中のことをあまり知らない18歳という年齢で人生の道を選択することになりますから。きっと入学後に自分の選択についていろいろ考えることがあったと思うんです。

半田：医学部と決めたのは、高3の11月頃です。もともと生物の研究をしたいという気持ちがあって、そのためには、理学部と工学部という選択肢と、医学部という選択肢がありました。最初は、純粋に自然界のことを研究したいと思っていたので理学部志望だったのですが、実のと

ころ自分の興味は研究だけじゃなかったんです。文系的なことにも興味があったし社会の制度とかにも興味があったのでかなり迷いました。

ちょうどその頃、医学部は医者になるだけが全てじゃないということを知ったんです。医学部を出て医者になり、その後厚生労働省に入って医療政策に携わる人もいれば、医学の知識を活かして他の分野で研究活動をする人もたくさんいるということを高校の終り頃に知って、医学部という選択も悪くはないかなと。

哲学にも興味だったので、人の生死に関わる現場に身を置いてみたいという思いもありました。そう考え始めたら自分の幅広い興味に応えてくれる学部は医学部だと思い始めたんです。

その頃は「現場の当事者じゃないと分からないことこそ大事」という強い思いがあって、医療現場の最前线に一度身を置いてみるのもいいだろうと思っていました。

実際に大学に入った後はむしろ逆で、医療現場よりももっと土台になる学問の方が面白そうだと思い始めました。いろんな研究室をまわってみて、自分にとって一番ピンと来るのは、直接治療に役立つ研究より、学問の裾野を広げていく基礎研究の方が興味深いと考え始めるようになったんです。

亀井：医学部って、入る段階で目的

を狭めてしまう印象があると思うのですが、実際にはいろんな可能性を持つ学部です。

大きく分けると3つあって、基礎医学、臨床医学、社会医学です。基礎医学というのは生命科学の研究、臨床医学というのは実際に患者さんと接しながらその病気を見ていくというもの、社会医学は医療政策などです。

「医学部に入ったら医者になるしか道はないだろう」と考えてしまう受験生が多いと思いますが、全然そんなことはありません。特に東大で力を入れているのは、次の医学をつくる人間の養成です。また、基礎医学研究では、俯瞰的な視点が養えて生命科学研究をする上で大きな強みになります。工学との連携では人工臓器をつくる研究などもあり、実のところ医学部の研究領域は多岐に渡っています。

半田：そうしたことは受験生にはちゃんと知ってもらいたいと思います。医者になる以外にも医学部での勉強を活かせる道はたくさん広がっています。

もちろん、医療の現場に身を置くことも大切なことです。でも、「医学部に入ったら医者になる」という固定観念にとらわれる必要はないと思います。

亀井：ほんとにそう思います。今年の五月祭でも、高校生対象の医学部企画で、基礎医学、臨床医学、社会

医学の先生に1人ずつ来ていただきパネルディスカッションをやりましたが、医学部の幅広い進路を知って欲しいという気持ちからの企画でした。

僕たちにとっての グノーブルと中山先生。



森田：僕は、いわゆる受験勉強は好きではなかったのですが、でも、グノーブルでの勉強は好きでした。

具体的には、受験に対応する力をつけていただいたことにはもちろん、本当に感謝しています。しかし、授業がそこに留まらずに、いつも興味深い題材の英文に出会えて、受験に関係なく知的に面白いと思ったことがグノの魅力でした。受験勉強が将来につながっていたというか、受験勉強を通して好奇心の幅が広がった気がします。

谷内：中山先生は生徒を見る力がずば抜けていて、自分でも分からなかつ自分で教えてくれたというか、先生を介して自分との対話をしていたという思いがあります。

うまく言えないのですが、たとえば、授業で当たれることも、初めはとても嫌でした。自分の実力や勉強に向かう姿勢が分かっちゃうから嫌だったんです。つまり、本来自分が1人で向き合わなければならぬことを、中山先生に暴かれてしまうということです。授業中の当て方とか、毎回の添削のコメントとかで

暴かれてしまう。

でも、基本的に中山先生はいい人なので(笑)、英語に前向きじゃなかった頃から本当に尊敬してました。だから、英語嫌いになることもなく、結局自分と向き合うことになり、お陰様で英語の成績も伸びました。避けていた科目がだんだん好きになっていくって、やっぱり先生は並の先生ではないと思います(笑)。

自分と向き合うことが次に進むきっかけになるというのは、他の教科や、勉強以外のこと、自分のいろんな考え方にも、影響しています。

半田：僕は、いい英語が身についたなということに一番感謝しています。合格後に書いた体験記には「グノの勉強法は王道だと思う」と書きましたが、今でも本当にそう思っています。

中山先生の英語指導は魔法、とも言われていましたが、確かに、学校や他塾とはかなり違うところばかりでしたが、今考えても理にかなっていて、本当の実力がつくと思います。

亀井：僕は、楽しかった印象しかありません。中山先生には高校の3年間お世話になりましたが、「行きたくないな」と思ったことはただの1度もありませんでした。むしろ、どんなに学校行事やその他のことが忙しくても、「グノだけは優先」と感じていました。最初から最後までずっとそうで、今から考えるとこれはすごいことだったんだと思います。

中山：今日は久しぶりに皆さんとゆっくり話ができる、あらたな勇気と力をいただきました。これからも、グノーブルの他の先生たちと力を合わせて、皆さんの後輩の指導にさらに邁進していきます。

皆さん、それぞれの道で活躍されることを心から祈っています。

今日は本当にありがとうございました。

『座談会を終えて』

中山先生を囲んで同期4人で語り合いううちに、毎週楽しみだった英語の授業が懐かしく思い出されました。

グノでは、受験を超えて一生役立つ英語力はもちろん、向上心や知的好奇心といったものも学んだように思います。一人ひとりの生徒をしっかりと見て指導する姿勢を失わずに、今後もグノの理念をどんどん広めていってほしいです。(亀井亮佑)



東大合格発表会場での亀井くんと中山先生

先生や友人たちと懐かしい話ができ、楽しい座談会でした。高校時代や今までを振り返り、これからまた頑張ろうという気になりました。座談会後には夕食をご馳走になりましたが、その席でも様々な話題に時間が経つも忘れました。先生の引き出しの多さは高校生だったころと同じで、当時は本当にいい授業を受けていたとの思いもあらたにしました。(半田剛久)



東京医科歯科大合格後の半田くんと、彼の同級生となった卒業生の皆さん+グノの先生たち

久々に中山先生にお会いして、創立以来変わらないグノの理念を感じました。大学受験塾ですから、受験を突破することが大切な目標であることは間違ひありませんが、単に合格すること以上に、ゆるがない英語力、幅広い視野、そして学ぶ喜びといったものを毎回の授業で伝えていたいことをあらためて実感しました。(谷内稜)



東大合格発表会場での谷内くんと中山先生



東大合格発表会場での森田くんと中山先生



あれから4年、逞しくなった今の彼らと中山先生

《お詫びと訂正》

前回5号前編において、亀井亮佑くんのお名前と、森田悠介くんの学科名の表記に誤りがありました。深くお詫びをいたしますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

誤／亀井亮佑→正／亀井亮佑 誤／理学科→正／物理学科





GSL

(グノーブル独自開発音声教材)
活用編①/全3回:中1

前回の5号では、関田先生にご案内いただき『センター発音問題対策講座』の音録り現場をレポートし、グノーブルの音声に対するこだわりを紹介しました。引き続きこの6号より3回シリーズで、GSLをさらに深く掘り下げていきます。

今回は、中学1年生で初めて本格的に英語を学ぶ生徒さんが、どのようにGSLと関わるべきか、そしてその心構えなどを、関田先生、清水先生にお話しいただきました。

(取材：吉村高廣)

英語力がみるみる伸びる、 音声教材GSLの仕組み。

清水：公立の小学校から中学受験をなさったお子さんは、受験科目に加えて英語も同時に学習することが難しかったため、ほぼ白紙の状態でグノーブルで英語を学び始めるケースがほとんどです。

一方、小中高一貫校の小学校にお通いだった方の中には、受験勉強のハードルがないことから小学生の頃から英語の塾に通っている生徒さんが結構いらっしゃいます。

こうしたことから、新中1生対象の入室説明会などで保護者の方から「早くから英語に取り組み始めた生徒さんについて行けるでしょうか」という質問を受けることがしばしばあります。保護者の皆さまにしてみれば当然のご心配かと思いますが、私たちは「全く心配ありません」とお答えしています。なぜなら、中学受験を経てきた生徒さんは、勉強に対して積極的な姿勢を持っていて、

復習の習慣が身に付いているからです。

グノーブルでは、テキストとリンクした音声教材GSLを使い、授業で理解したことを、音声を聞きながら反復することで身に付ける“復習の仕組み”を構築しています。これを私たちは『ワークアウト』と呼んでおり、日頃の勉強の中でワークアウトの習慣を身につければ、英語に触れた経験のあるなしを問わず、スポンジが水を吸収するように英語力が向上していくのです。

関田：2011年度から小学5、6年生は英語が必須科目となりましたが、実は2年前から移行措置が始まっており、今グノーブルで授業を受けている生徒さんは皆、学校で英語に触れた経験を持っています。

ところが、アルファベットの正しい読み方や書き方、単語の綴りについてはほとんど体系立った勉強をしていないため、公立小学校から中学受験を経た生徒さんの多くは、しっかりとした英語学習をしたことありません。

一方で小中高一貫校の生徒さんの相当数は英語の塾や英会話学校に通った経験を持っており、中には既に英検3級程度を持っている方もいます。したがって、新中1スタート時点での知識の差はあるのです。たとえば基本的な英単語や会話表現を知っている、そうした部分での差は確かにあります。

であるにも関わらず、なぜ私たちが「心配ありません」と言い切れるかといえば、GSLを使ったワークアウトは論理的に考えて最も効率の良い勉強方法であり、中学受験を通して勉強する姿勢を身に付けてきた生徒さんたちには馴染みやすい仕組みだからです。

将来使いこなせる英語力を習得したいと考えるなら、音声学習を抜きにはできません。どれだけテキストと首っ引きになって勉強しても、英語力の向上には限界があります。授業で理解した英文を、復習において音声を頼りに繰り返し聴き込み、口まねをして発音してみる。さらには、テキストを見ながら耳に残っている音を



英語科 関田 裕一

頼りに音読し、そして最後は暗誦する。このように、常に音声に触れながら英語を学んでいくことで、英語はみるみる上達し、中学時代に身につけるべき基礎力は万全なものになるのです。

GSLの効果は、 授業ありきで実感できるもの。

清水：大事なことは、あくまでも授業ありきということです。先にも申し上げた通り、GSLは授業で理解したことを体に染み込ませる教材ですから、授業に参加せず、ただ聞いていれば英語力が向上するわけではありません。正確な表現力、特に動詞の使い方は、授業中にきちんと理解した上で、GSLを使用したワークアウトを欠かさずやることが肝心です。言うなれば、グノーブルの英語は、リアルな授業とGSLを使った復習が1つのパッケージになっています。両者を組み合わせて高い学習効果が得られるよう考え方抜かれた学習メソッドなのです。



英語科 清水 誠

このあたりが『授業をやってそれでおしまい。復習は各自それぞれやっておくように』という学習法とは、一線を画するスタイルであると言えます。

関田：まさにその通りですね。だからこそ、授業には休まず出席していただきたいと思います。

私の経験上、伸びる生徒さんは、欠席や遅刻をせず、宿題→授業→GSL（復習）というサイクルが生活の中にしっかりと組み込まれています。このサイクルを崩してしまうと、緊張感を持って授業内の演習ができなくなり、その後の解説も理解があいまいになり、当然ながらGSLでワークアウトする気力も失せてしまします。

特に中学1年生のうちは学校での毎日が目まぐるしく変化するため、ときには保護者の方の叱咤激励も必要になるかも知れません。どうしても休まざるを得ない場合は、必ず振替授業に参加されることをお勧めします。

清水：そうした面でも、中学受験を経験している生徒さんは勉強に対して貪欲な傾向があります。理解する喜びを知っているためか、どんどん前向きになっていくのです。実際、GSLを使って理解や表現の幅が広がっていき、自分の成長を実感できるのは、中学生にとってはとても面白いことのようです。「やらなきゃいけない」といった義務感で勉強をするのではなく、理解できて面白いから「勉強したい」と思える、いい意味でのサイクルができ上がっていくといいですね。

高度な英語を学ぶには、 音声抜きでは考えられない。

関田：中学時代は、文法をしっかり学ぶことが最重要課題です。ただそれは重箱の隅をつくように細かいルールを暗記する勉強のことを指しているのではありません。さまざまな基本例文を頭にストックして、臨機応変に引き出せるようにすることが肝心。そして、その最も効率的な勉強方法がGSLを使ったワークアウトなのです。

テキストに書かれた英文を眺めながら黙々と勉強しても、丸暗記の勉強では生きた英文法の習得にはつながりません。より高い次元の英語を学ぶためには音声の導きはどうしても必要です。英語を身につけるというのは、少し他の科目とは違う感覚があります。自分の中に、英語のロジックを使うもう一人の自分を育てていく感じがあるのです。耳や口もいっしょに鍛えて、英語を使う自分を作り上げていくのです。

また音声を聞き取り、意味を即座に解釈できる知識の積み上げがないと高校生になってから、さらにレベルの高い文章を前にしたときに本当に困ることになります。日本語の思考回路を使って、日本語の語順に変換しながらうんこらどっこらやっている生徒と、英語の思考回路を持っている生徒とでは、スピードも正確さもまるで違います。

清水：そもそも、日本人なら学校に行かなくても日常生活を送るための日本語は誰でも身につきます。しかしながら、小中高と学校のカリキュラムの中に国語の授業があるのかといえば、それは知的によりレベルの高い言語力を身につけなくてはならないからです。

グノーブルが目指しているのは、そのレベルの高い英語力です。ひいてはそれが高校生になってからの活躍や、大学受験、社会に出てからの“使える英語”につながって行くのです。そして、そんな英語力を手に入れるためには、GSLで英語の耳と口を鍛え、読解力や語彙力、さらには瞬発力を伸ばすことが欠かせません。

(7号に続く)

2011年 東大理科Ⅲ類合格 安田陽平くん執筆

『僕はこうして理Ⅲの門をくぐった! 勉強法大公開』第2回

ペーパーバックを読みふけり 力をつけた高1時代。

こんにちは。これを書いている僕は今夏休みで、テニス漬けのサークル合宿やら、8月末の試験勉強やらで忙しい毎日を送っています。大学での試験勉強は、まだ要領を得ていないところもあって大変です。

試験勉強といえば、受験時代から僕は独特な勉強法をしていたように思います。いろいろな方法を模索し、自分なりにしきりにした方法で勉強するタイプで、押しつけられた勉強法を鵜呑みにするのは苦手でした。英語に関しては、単語帳は使わない勉強をしていました。単語帳を暗記するよう言われても意地でも覚えなかつたので、学校の先生は相当手を焼いたと思います(笑)。

※

僕がグノに出会うまでの英語の勉強はかなり変わっていましたと思いますが、中でも特徴的のは、ペーパーバック(軽装の洋書)を何冊も読んでいたことだと思います。高1のころは英語の勉強時間のほとんどはこれに充てていました。僕はペーパーバックを、わからない単語があつてもとにかくどんどん読み進めて行き、何度も読むうちに出てる頻度の高い単語はなんとなく文脈から意味を推定して習得していくといったやり方で利用していました。結果、読むのはかなり速くなりました。

しかし、この勉強法にはいくらか難点がありました。例えば、単語の習得が著しく遅いことです。頻度の低い単語はそもそも覚えずじまいですし、頻度の高い単語でもきちんと調べないために意味を勘違いしていることもあります。また、誤読に気づかず、隠れていた重要な文法などに気づかないときもあったと思います。そのためか、一定量ペーパーバックを読んだ後は僕の学力は伸び悩んでいたのです。

高2の春に偶然訪れた、 グノとの衝撃的な出会い。

ちょうどそのころ、僕はグノと偶然会ったのです。新宿で道に迷い、たまたまそこでグノの広告幕を持っていた警備員さんに遭遇し、きまぐれで寄ってみたのが運命の出



やすだ ようへい
安田 陽平くん(東大理科Ⅲ類1年 栄東出身)

会いでした(笑)。その時は高2春期講習のころで、合わなかつたら「やめてもいいや」くらいの気持ちで入塾してみたのです。

初めての授業で、たくさんの演習プリントが配されました。それが…終わらないのです。しかし見渡すとこれをそつなくこなしている人もいて、周囲のレベルの高さを感じました。

授業を受ける中、グノの演習は、たくさんの量を短時間でこなすことで、速く読む訓練になるのを感じましたし、単語帳を使わないやり方も含め、グノの勉強法はそれまで僕が無意識にやっていた勉強法と似ていて、講習を通し、「グノしかない」と確信を得たのです。

加えて、演習は、文章のレベルが高く、また、演習後の解説が徹底していたため単語や文法をわからぬまま放置することもないので、とても力がつくのを感じました。先生が生徒に答えを聞いていく形式も、緊張感から眠くならずに集中して授業を受けることができました。単語も派生を使って有機的に教わったことで、覚えやすく忘れにくく、とても効率的な勉強法であることを実感しました。

GSLを使った復習で、 授業の解説を自分のものに。

また、教材の充実度や勧められた復習法についても「はっ」とすることが多かったです。授業でやる毎回の長文にはGSLというリスニング教材がリンクしていて、リスニングの練習と授業の復習が同時にできたほか、音読で復習することで文章を途中で戻らず読み通す癖もつき、復習によって更に素早く正確に英文が読めるようになってきました。宿題も手ごたえのある量で、宿題と復習だけで英語の勉強は十分でした。

さらにいうなら、グノは教養が身につく塾だとも思いました。毎回題材の文章の背景知識まで解説され、本当にためになりました。余談ですが、野鳥の話になると中山先生が超白熱して解説なさるのがとても面白かったです(笑)。

長くなりましたが、以上が僕の入塾以前の勉強方法と衝撃を受けたグノの英語との出会いです。この塾だからこそ僕は力がついたと思っています。きっかけとなった警備員さんと自分のきまぐれに感謝!(笑)。



渋谷本館エントランスには警備員を配置しています。



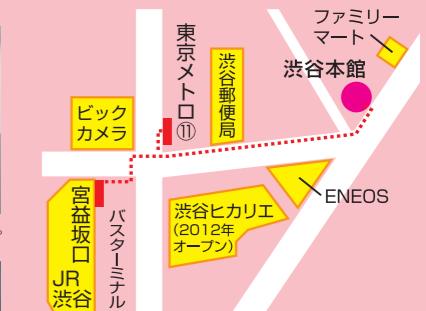
宮益坂下にもグノブルのフラッグを持った警備員が立ち、渋谷駅から塾までの安全を守っています。

グノブル渋谷本館が、宮益坂上の新築ビルに移転。より良い学習環境で、9月26日から授業がスタートしました。

JR渋谷駅宮益坂口から徒歩5分。宮益坂を上り、青山通りに面した好環境の立地に、グノブル渋谷本館が移転し、9月26日より授業が開始されました。新本館は、9階建て新築ビル(青山CRビル)のうち6フロアをグノブルが使用。1階が受付と職員室・印刷室、2階・3階は大教室が1つずつと、4階・5階・6階には小教室を2つずつ、計8教室を設けています。また設備面でも、旧来の3人がけ長机をやめて独立型の机と椅子を設置するなど、集中して勉強に取り組めるよう配慮しました。多くの生徒さんが新築の校舎や教室を喜んでおり、「あまりにキレイなので、あちこち見て回らざるにいられない!」という声も。職員一同、生まれ変わった渋谷本館で、新たな気持ちで授業に邁進していきます。



明るくきれいな受付で皆さんをお迎えします。



渋谷本館 〒150-0002 渋谷区渋谷1-7-6 青山CRビル
交通: JR渋谷 宮益坂口 徒歩5分
東京メトロ渋谷11番出口 徒歩4分

この一冊『真贋』

大胆に世の中の事象を切る。吉本思想の入門書。

今の世の中は「すべてが逆の方向に進んでいる」と吉本氏は言う。あまりにも常識的な“問い合わせ”と“答え”にあふれていて、実は本当に考えるべきことを考えず、本来は考えなくてもいいようなことばかりに思考が及んでいるのではないか。それはもう「滑稽ですらある」と。思想家としては珍しい“理系出身”ならではの論理構築をベースとして、物事の善悪について、人の生き方について、才能ということについて、意外な角度から大胆に切り込んで行く。詩人であり評論家でもあり、また“戦後最大の思想家”とも称される氏独特的の視点と、思考の果てに生まれた軽妙かつ深淵な言葉の数々が満載された“吉本思想”に触れる人の入門書ともいえる一冊だ。

編集後記

前回から2回にわたってご紹介してきたグノブルOBたちの座談会。現在は、それぞれの研究分野で活躍される皆さんですが、今に通じる“学ぶ姿勢”は「グノブルの授業で培った」ということで意見が一致していました。大学に合格することのお手伝いが第一義とされる進学塾にあって、受験だけでは終わらない、永続的な“学び”に対する興味や習慣を彼らはここで身に付け、これから、さらに大きく飛躍しようとしています。今、グノブルで学ぶ生徒さんたちにも、彼らと同じDNAが育まれつつあります。グノブルを信じ、そして自らの努力を信じて、新しいステージに立った時、ぜひこの紙面で皆さんの活躍を紹介したいと思います。

◆今回の表紙は、ロシアの作家マクシム・ゴーリキーです。英文の内容は『本当の才能とは、己自身を信じ、己の力を信じるところから生まれる』というものです。



吉本 隆明著
講談社文庫
(495円/税別)

